
とある未来の分岐点？

マルコ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある未来の分岐点？

【Zコード】

Z5977Z

【作者名】

マルコ

【あらすじ】

『一端覧祭』世界最大の超巨大文化祭の準備が進められる中、当麻はとある少年に出会った。

そして聞かされる彼の願い…「自分を消して欲しい」いつもの様に訳の分からないま、

事件に巻き込まれていく当麻は消えたいと願う少年を救う事が出来るか！？

様々人物を巻き込んで『一人の少年と当麻の未来』が重なる時物語が始まる！

爆発するのー? (前書き)

終わったばかりですが次の作品を載せよ!と頼こます。

今回のは奥へある「メテイ系で行きます。

だけじ今回のは前のみたにに早く週に一度のペースで連載できるか
分かりませ。

爆発するの！？

とある日、上条当麻はよくお世話になる病院のベットで当麻は寝ていた。何か何時ものようにとんでもない事件に巻き込まれた訳ではなく、今回の病名はただの食あたりである。やる事もなく、ただ寝転がっていると数回のノックの後にカエル顔の医者が入ってきた。

「君が来たときは、またか…と思つたけど、今回は大した事なくて良かつたね」

「あはは…」迷惑お掛けしました…」

「まったく、なんで食あたり起こすような物を食べたんだい？」

「いや～インデックスが食べた時は、なんともなかつたから大丈夫だと思つたんだけど」

「てことは、彼女も同じものを食べたのかい？なんで彼女は平氣なんだい？」

カエル顔の医者は顔を歪めながら不思議そうな顔をした。当麻もあきれながらも答えた。

「さあー神様にでも愛されてるんじゃないんですか」

「まつ…一日様子を見たところ問題無さそうだし…もう帰つても大丈夫だよ」

「ああどうも」

「次は気をつけるんだよ…もつすべ一端覧祭だつていうのに」

はははと苦笑いを浮かべる当麻に背を向けてカエル顔の医者は、部屋から出て行つた。

帰宅の許可を出されたので当麻は、帰る支度をし始めた。一日の入院だつたが着替えが少しあつたのでバックに詰めていると、又してもドアが数回ノックされた。

「ん？ はいっ… どうぞ…」

返事を聞いたドアの向こうの人物はドアを開けて中に入ってきた。入ってきた人物は医者なのか白衣を着ていたのだが、その頭はモジヤモジヤでりおそらくパンチパームであるうと当麻は思った。そして、顔には今時どきに売っているのか分からぬ丸いレンズの眼鏡を掛けており、どう見ても怪しいとしか言えない人物であった。

「何をしているんですか？」

思つたより若い男の声で尋ねてきて、当麻はこんな先生いたつけると考えていたが、一先ず質問に答える事にした。

「えつ？ いやあ… 先生がもう返つていいって」
「帰る！？ 「冗談じやない！ まだあなたは入院してもらわないと！」

「えつ！？ いやつなんだ！？」
「いいから！… ほりつベットに寝て… 安静にしないと…」

訳の分からんことを言い出した医者は着替えを詰め込んだバックを適当に投げ捨て、当麻をベットに無理やり寝かした。

「いやつ… なんですか！？ 急に…」
「いいから… 安静にしてください… ともないと…」
「ともないと？」
「えーと… なんか爆発します」

「いや……何それ？！？何が爆発すんの……？」

「ですから、爆発します……」

「だから…？」が……」

訳の分からぬことを言つ医者に、ギャー、ギャーと叫ぶ当麻だったが、医者が急に当麻に顔を近づけ

「よく考えてみてください……爆発ですよ……そしたらどこのがなんて関係ないでしょ……！」

「えつ…？いやあ、たしかに」

「最低でも一年……安静にしていてもらいます！では……」

言い返したかったが、なにやらとてつもない威圧感を感じ当麻は、何も言い返せず、医者は部屋から出て行った。当麻は半ば涙目になりながら呟いた。

「なんなんだよ？一体…爆発って？」

言われた通りに安静にベットで寝ていると、カエル顔の医者がまたやつてきた。半泣き状態でベットに寝る当麻を見て首を傾げた。

「何をしてるんだい？帰らないのかい？」

「あつ…？先生ッ！俺どつなるんですか！…？」が爆発するんですか！？」

「何を言つているんだい…君は？」

当麻はカエル顔の医者に先ほどのことと説明すると

「そんなことある訳ないだろ？…第一そんな先生、私は知らないよ」

「ええ…？…じゃあ？」

「さつと誰かの悪ふざけだよ…少なくとも私が見る限り異常はないよ」

「さつ…ですか…たくつ…一体誰が?」

考えてみても分からぬので、当麻は取りあえず、先ほどのバックを持って病室を後にした。

爆発するのー? (後書き)

ここまでです。

正直シリアルスよりもコメティイの方がやりたかったので
これを書いて結構嬉しいです。

ちなみにこの作品は昔、とあるところに載せましたがあまり評判が
良くなかつたので止めた作品でもあります。

今度は最後まで書きたいと思います

古いって結局、自分で都合いいヤツを信じるよね（前書き）

続きです。

ちなみにこれはオリキャラは一人だけの予定です。

古いつて結局…自分で都合いいヤツを信じるよね

退院した次の日、当麻は一端覧祭の準備をする為に学校に向かつていた。その横には派手な修道服を着たインデックスもいる。普段なら学校に行っている間は、家でお留守番なのだが、今は一端覧祭の準備期間はだいたいの学校が午前中授業となり午後からはもっぱら一端覧祭の準備となる。そうなれば、誰が学校にいようと大した問題にならないので、当麻はインデックスを連れて行くことにした。連れて行くと言つても、インデックスが無理やりついて来ただけで当麻も準備の手伝いぐらいしてくれるだろ?と思つて連れて行くことにした。

「ねえーとうまー、今日準備が終つたら、またみんなでどうか食べに行くの?」

「結局、それが狙いか…言つとくけど今日は準備だけだ」「なあーんだ」

「つたく…みんな急がしいんだから、手伝いぐらいしりよ」

「任せといてよ!味見なら自信があるんだよーー!」

「うちのクラスは、そんな出し物しねえよ」

能天気だな思いながら歩いていると、コンビニの横のうす暗い路地に繋がる道の入り口に机と椅子を置いて古いらしき物をやつしている。なにやら年寄りが着ていそうな和物の服を着て、口の周りに白い髪のある男が話しかけてきた。

「そこのお兄さん…」

「んつ! ?俺?」

「ええ…あなたです…あなた今日は学校に行かないほうが多い」

「えつ！？ なんで！？」

「あなたの今日の運勢は最悪です…」そのまま行くと大変なことになりますよ」

「ええ…マジですか…」

突然の予言に驚く当麻であつたが、会話を聞いていたインデックスがムムツと顔が強張り占い師に詰め寄つた。

「ちょっと…アナタつ…」

「えつ！？あつ…はい」

「一体何の根拠があつてそんな事言つたの…？」

「えつ！？根拠つて…」

「だから一体どうにいづくつをやつてるの…？日本のもの…？それとも中国、インドとかアジア系のもの…？それかヨーロッパとかのもので占つてるの…？」

「えつと…」

急にインデックショーンの上がつたインデックスに占い師も当麻も困惑つたが、インデックスの正体を知つてはいる当麻はおそらく、膨大な魔術の知識を持つてはいるインデックスにとつてはどうやらつて占つてはいるのかが気になるのだろうと考えたが、取りあえずこんな所で魔術知識を暴露するわけにはいかないので

「インデックス落ち着けよ…」この人は、俺が不幸にならないようだと親切に…」

「別に当麻の不幸なんて今に始まつた事じやないだよ…」

「あつ…たしかに」

正論を言つインデックスの意見に納得してしまつた当麻を見た占い師は当麻に詰め寄つた。

「いえいえ！…今日のあなたの運勢は、過去最悪です！…今すぐ家に帰つて下さい…！」

「だ〜か〜ら〜！…一体どういう根拠でええ…！」

よつぽど頭にきたのか、突然占い師に服に掴みかかり問い合わせ始めたので、占い師は驚いてバタバタと抵抗している。それを見ていると、どうも、可哀そうになつてしまい取りあえずインデックスを占い師から引き剥がそうとインデックスと占い師の間にに入ったが、中タイミングでツクスが離れないのでかなり力を入れてインデックスを占い師から離した。しかし、勢いがありすぎた為かドタンッ…！と後ろにインデックスと一緒に倒れてしまった。

「痛つてえ〜…つたく…！…何してんだよ…！」

「だつてえ〜」

「んつ？それなんだ？」

見るとインデックスの手にある白い毛の塊があった。占い師の方を見てみると占い師の顔から白い髪がなくなつて、なにやら見た事がある顔が出てきた。当麻は考えたなにやら昨日ぐらにに見た事がある。

そう、なんだかよくよく考えてみれば昨日も同じよつ事があつた気がする。

「あつ…お前昨日の……」

「しつ…しまつた……」

「てめえ……昨日といい今日といい……一体何の恨みがあるつて言うんだ…？」

「いやつ…そんなつもつはつ……私は、あなたの為に…」

「なにが俺の為だ……訳の分かんねえ…嫌がらせしやがつて……」

一発殴るつかとも思ったが、いちいち相手にするのも面倒なのでさつさとその場を離れる事に決めた。

占い師をほつたらかして歩いていくと、その占い師が着ていた服が邪魔だったのか、それを脱ぎ始めて中から、普通の若者が着そうなジーパンとトレーナーという格好になつた。どうやら、先ほどの占い師の格好は、上から羽織つただけだったようで先ほどの年寄りのイメージと違い。普通の若者、おそらくは当麻と同い年ぐらいに見える。少年は当麻のあとを追つて話しかけてきた。

「待つてください！騙した事は誤ります！でも！あなたに学校に行かれると困るんです！」

「なんだよ…何が困るんだよ…？」

「いやつ…だつて…学校に行くと…」

「なんだよ…？邪魔ばっかしやがつて」

無視して行こうとするが、前から良く知るバカの知り合いで声がした。

「お～い、かみやーん」

「んつ！ああ、土御門に青髪か」

「こやー、今日も授業さつさと終らせて、一端観察の準備に取り掛かろうぜー」

「ホンマ午前中授業は、楽やな～つて…だれや？その後ろにいるの

？」

「ああ気にしなくていい！ただの不審者だ…」

「いやつ…だから僕の話を…」

「なんやカミやん！女子だけでは飽き足らず、ついてて男子ともフリゲを立てるようになったんやな～」

「黙れ！青髪…！」

などと馬鹿な掛け合いをしていたが当麻にとつてはこの謎の人物を無視するきつかけが出来たので、内心は安心していた。その後も馬鹿な掛け合いを続けていると、

「どうまーーあれーー！」

インテックスの声が聞こえたので見てみると、インテックスが道路を指差して驚いていた。道路を見てみると、一匹の子猫が道路の真ん中に飛び出していた。そして、なぜこうも完璧にタイミングが合うのかトラックが近づいてきて、あと数秒で子猫が轢かれそうになっていた。

「なつ！？クソツ！？」

当麻は、もはや反射としか言えない反応速度で、即座に道路に飛び出し子猫のもとへと走った。すぐに子猫のもとに着いたは、いいが、トライックは当麻の田の前まで迫っていた。

「どうまー！」
「カミやんー！」

友達の声が聞こえる中、田の前に迫るトライックを田にして、
(ダメだ!!)

と諦めた時、先ほどの少年が当麻に向かって走ってきた。そして、当麻は聞いた聞き間違えではなく。確かに少年は叫んだ。

「父さん！！」

（めでて結婚…自分で教會にマサニエルの（後書き）

あ、これでだいたいやつが話が分かってきたと思います。
でも私はこういう単純なものが結構好きです。
出来れば、私の好きなギャグ系を増やし楽しい話にしていき
ます。

ではまた今度

普段から絶対に助けるっていつよりも助けないっていつでもおきながら助ける方が

短いという理由もありますがギャグはなんだか書きやすい。
と書き訳で3話目です

普段から絶対に助けて貰つよつも助けなにつておきながら助ける方が

謎の少年は眞麻に飛びつき眞麻と共に横に飛び、眞麻は最悪の事態を逃れることができた。

「どうま！…大丈夫！…？」

「ああ…なんとか…」

道路の反対側から声をかけるインテックスによりよりと立ちあがり答えると自分を助けてくれた少年を見た。

「その……ありがとな」

「あつ……いえ…別に大したことね…」

妙な沈黙が続いているといつて、インテックス、青髪、土御門が道路を渡つて眞麻たちの所に来た。

「いや……今のは危なかつたぜい」

「ホンマやなーしかもあのトラック止まつせんと行つてもた

「無事でよかつたんだよ…」

「ああ」

みんなを心配させたことは申しわけないと思つが、それ以前に気になつてゐることがあった。が

「いやー君ホンマに勇気あんなー俺やつたらカ///せんなんかの為にあんなことできへんでえー」

「えつ…そんな…褒められるよつなことば…」

「「」やーーーまつたくだぜい…カミやんなんかの為に命投げ出すなら…俺は喜んでカミやん命を捧げるぜよ」

「「めぐーり…すげーヒドイ」と言つてんの理解してんのか！？」

あまりに薄情な友達にツツ「」を入れていると、当麻は少年の方を向いて先ほどの事について聞くつと思つた。

「なあ…お前…さつ」

「ツー？すいません…失礼しますつ…！」

突然そつ語つと、少年は一気に走りだしてビ「」かへ行つてしまつた。

「カミやん…わつものあれビ「」の意味ぜよ？」

青髪、インテックスが全速力で走り去る少年に夢中になつていると小声で土御門が尋ねてきた。

「…俺の方が知りたいよ…お前は？何か情報入つてないのか？」

「いいや…特にこれと言つて魔術師が入つたみたいな情報は…」

「そつか…」

「何者せよ…あいつ…」

「はあー知りたくない氣もするんだよな～」

当麻はつるぎりしながら呟いた。

なぜなら、こういう訳の分からぬ奴が出る時は大抵上條当麻は面倒な事に巻き込まれるからである。

普段から絶対に助けるって言つよりも助けないって言つておきながら助ける方が

短かったですが、次にはもう場面が変わるのでここで区切れます。

やっぱり焼き肉って偉大だよね（前書き）

短いとはいって、一日で4話も投稿できるとは
当麻V.Sローマ・学園をやつてた時は考えられないスピードです。
やっぱ俺はホノボノした話しが合ってるな
そんな訳で4話行きます

やっぱり焼き肉つて偉大だよね

数時間後、当麻は学校の授業が終わってみんなが一端覧祭の準備をしている中、屋上に向かっていた。

理由は先ほど外で待つインデックスを呼びに行くために下駄箱に言ったところ、

当麻の靴と一緒に一通の手紙が置いてあつた。

「インデックスさんは預かっています。助けたければ屋上に来てください」

分かりやすい内容であつた。そして、すぐに誰が書いたかもすぐに分かった。

とにかく、無視するわけにもいかないので当麻は屋上へと向かつた。予測は出来ていたが、やはり面倒な事になるようだと改めて身に染みた当麻であつたが意を決し屋上に出る扉を開けた。

「ねーねー手伝つたら焼き肉に連れてつてくれるの？」

「ええ、うまくいったら御馳走します…あつ…？」

「何?…あつ…」

ドアを開けた先には特に何か縛られている訳でもないインデックスと朝見た少年がいた。

どうせ悪人のような行動を取るなら悪人らしく、動いたら「イツの命はない!くらいのことをしてくれればいいものあまりの悪人とは言い難い状況にバタンッ!!と当麻はドアを閉めた。どうするべきか考え、最終的にきっと今のは見間違いだと言う結論に至り、も

う一度ドアを開けることにした。

「来ましたね！」

「わーとつまー助けてーーー（棒読み）」

バタン… またドアを閉めた。
見るに堪えないとはいつこの事か、と上条玲麻は学園の
ことが出来た。

「こやつー待つてーー確かにグダグダでしたけどーーー」

ドアの向こうから聞こえる必死の声に仕方なくもつ一度ドアを開けて、取りあえず言いたいことを言つことにした。

「……わー…えーまかづかうだな…準備をしておけつてーーー」とが

一点…次に棒読み演技をどうにかしろ

…そして最後に、インテックス…焼き肉に釣られるなー

「…だつてえー」

いじけてくるような声を出してはくるが焼き肉にかられ面倒事に手を貸すインテックスを一々心配しようと思わなかつた。
といつより先ほどの様子から見て心配する必要もなさそうだつた。
ムーフと不貞腐れるインテックスをして置き、当麻は謎の少年と向かい合つた。

「またお前か…」

「おとなしく帰つてもうえませんか？」

「だからなんで帰らないといけないんだよ？理由を言えー理由をー」

「理由は言えません…ただ、おとなしく帰つてもうえられないなら…力

づくりで…」

人質であるインデックスが役には立ちそうにないので、少年はどうやら戦うらしい

当麻もここまでいろいろされて黙つてはいるわけにもいかない、右手を握りしめて一気に突っ込もうとしていた所にバコンッ！と突如謎の物体が謎の少年の頭に激突した。

何が起きたか分からなかつたがバタリ倒れる少年の近くにコロコロ転がる物を見て理解できた。

少年にぶつかつた物は野球のボールであつた。そして、なぜここに飛んできたのか説明するかのように遠くの運動場の方から微かに声が聞こえてきた。

『見ろ！！俺の特大ホームラン！』

『ばか！！あんなどこまで飛ばして誰が取りに行くんだよー？』

『あれ！？おい！あれ上条じじゃね？』

『あつ！ホントだ…ラッキー！おい上条！ボール取つてくれ！…』

何やら親しげに声を掛けてくる生徒達だが記憶を失つた当麻にどうてはほぼ初対面状態であつた。しかし、当麻は面倒事にならなかつたこと名前も知らない彼らに感謝しつつ、届かないながらもボールを運動場向かつて投げた。

「お前の代わりに言つとこでやるよ…『不幸だ……』」

氣を失う少年に取りあえず当麻は優しい目をして呟いた。

やっぱり焼き肉って偉大だよね（後書き）

まだあまりキャラは出しませんが、
次回から色々出しあうと思います。

痛いものはなんだよね（前書き）

ちよつと気が付いた事

いつもサブタイを詠みすゝめてる気がする
これも当麻／＼ローマ・浮城の影響か
もつともうだらだらのじょひと詠こました。

優しかつて時には痛いものなんだよね

「でつ…どういふことだ…上条…！」

（「うちが聞きたい…」）

当麻は、オーディオDXを発動させた吹寄に正座をさせられている。聞きたい事は、

たつた今、当麻が連れてきた縄でグルグルに縛られた少年は誰なのか、そして、なんで拘束されているのか、

拘束している理由は単純である。未遂に終わつたが知り合いのインデックスを誘拐し、さらに当麻に脅迫もしてきたからである。

ただ、自分からついて行つたインデックスにも問題はあるし、何よりこんな状態で本当に焼き肉に連れて行つてくれるのかと

不安になつて少年の傍にいるインデックスを見ていると、それらの事件に対する怒りもほとんど失われてしまつた。

だが、かと言つて厄介事が終つた訳ではない。なぜなら、目の前にはさつむと「一端覧祭」の準備をしたいのに何やら厄介」とを持つてきた当麻をぶちのめしたいのであらう吹寄の姿があるからである。様々な危機を乗り越えてきた当麻には、吹寄の放つ嫌な殺氣（すでに何人か殺しているのではないかと感じさせるオーラ）を感じ取つていた。

周りのクラスメイトも巻き添いを恐れ、当麻、吹寄から離れているが、そこに

「「やーー！」にしても飛んできたボールに当たるなんて…まるでカミやん見たいゼヨ…」

「ホンマやな～」

場を和ませる天才3バカの残り2人が現れた。

「「「いや もしかしたら本当にカミやん息子かもしれないにやーーー！」
「えっ！？ それどういづことや？」

「いやー そういうや 青髪は気づいてなかつたかもしけないが・コイツ、
朝力ミやんに向かつて『父さん』つて呼んだんだぜい！」

「何やで！？ ほなアレか！ 時をかける少女とか、あつーこの場合は
少年か… まあ取りあえずそんな感じのファンタスティック少年つて
事かいな！？」

「にやー でもどりせなら、悪者を倒しに未来から来た時空警察のメ
イド課長の方が良かつたにやーーー！」

「いやいや… ここはセクシースーツで敵を倒すバーチちゃんの方が
！！！」

2人は吹寄が出すオーラを無視するがごとく訳の分からぬ話をし
ていた。

そのあまりの空気の読めなさに吹寄の先ほどのオーラ何処かへ行
つてしまつた。

土御門、青髪はふざけて話しているが実は当麻自身も彼の正体につ
いては少し考えていたが一番最初に浮かんだ
考えはすぐさま削除した。なぜなら

「土御門、青髪… 悪かつたわ… 私が殴りすぎちやつたから、こんな
になつちやつたのね… 本当にじめんなさい」

こうなるからである。今までに見たことのないくらい吹寄に優しく
された土御門と青髪は

「「止めてください、そんなに優しくしないで下さい」」

標準語に沿るべきシヨックであった。

「バカもここまで来ると心配になつてくるわね

吹寄は呆れると顔は憐れむような顔で土御門と青髪を見つめた。

「いや……」今まで言わされたら意地でも証明してやる……
「証明?」

土御門はあたりを見渡すと一端覽祭の準備で使われたであろう窓口ギリを持ってきて当麻の前に立つた。

「おい……土御門どうするつもりだ?」
「簡単にや……」それでカミやんを適当に少しだけ切つて、この少年が消えたらカミやんの子つて事になるぜよ……
「いやつ待て!それは『少し』じゃない!……その少年以前に俺の大変なものが失われる……」
「わがままだニヤー……なら……」

そうついつて、次に土御門は金槌を持つてきた(笑顔)。すぐ口どうしたいか分かったので

「だが断るつ……」

「なりつ……断ることを俺が断る……あつ間違えた……断ること……！」

「おい!アホ!今のは俺に死ぬ以外の選択肢がないことにシッコムべきか?それともキャラを忘れてたことにシッコムべきかどうかだ!?

優しかった時には痛いものなんだよね（後書き）

今日はこっさに5話も出来ましたが
次回からはどうなるか分かりません
多分こりこり短いのを何本も書いていくと思います

嘘をつくるのは簡単だ。けど人をだますのは難しい。（前書き）

めんどいから展開はパパッと勧めました。

嘘をつけるのは簡単だ。けど人をだますのは難しい。

「ハハハ～ン」

「おひー！田を覚ましたこやーーー。」

「ハハハ…」

少年は、辺りを見渡した後、自分が縛られているのを確認して溜息をついた。

「…ハセツ…なんでこいつ不幸な偶然が…」

「早速ですが！…質問です！…あなたは何年後から来たんだこやーーー」

「…おこイキナリかよ」

当麻は、目覚めていきなり確信もないをこと尋ねた土御門に今度は優しくツッコミを入れた。

（つーか、そう簡単に答えるわけ…）

「ナツナツナンノコトダカワカリマセン

「ハハハソヘタ！…！…！」

カタコトにカタコトで返してしまひまび驚いた。

（…ハハマで来ると…逆に疑えなー）

「ハヤーーーその慌てえよつーせつぱり未来から来たんだこやーーー！」

「…………」

少年は、黙り込んでしまったがその態度で土御門の考えが事実であることを物語つていた。

「まったく……そんな突拍子もない事を信じるど？」

だが、吹寄が信じていないと言った田代少年と土御門を見てきた。

「信じるか信じないかは、勝手だにやー……でも本当に未来から来たなら、やつぱり気になるぜい」

「……僕は嘘が下手ですし、もう変に話をややこしくしたくないので未来から来たことは否定はしません……けど未来の情報は言いませんよ」

「なら仕方ないこやー」

土御門は、クラスの外に居る男子に向かい

「モテナイ諸君ー今から憎むべき旗男を『ヒモなしバンジー』の刑に処するー手伝った者は前に出ろーーー！」

6～7人の男子無言でクラスに入つてみると当麻の手や足を掴んで窓へと向かつた。

どうやら、この少年が未来云々から来たことより上条当麻抹殺には興味があるらしー。

「えつーこやちゅつと待つてーー何ホンキーー本氣と書いてマジーー？」

？」

「「「上条に死を…上条に死を…上条に死を…」」

「怖いからーー！」

何かのカルト集団の様になつてゐる中、土御門はお氣樂をつに手を振つていた。

「カミやん 良い旅を～」

「土御門……テメヨ……」

あと少しじつから落とされやうになつたときには、少年が慌てて声を出した。

「まつ……待つてください……！」

その言葉を聞いた土御門は、男子たちを止めるよう指示をした。

「話す気になつたようだ」や

「……あらがつても無駄のようですが……少しだけなら」

嘘をつくるのは簡単だ。けど人をだますのは難しい。（後書き）

もつとギャグを入れたいんですが
まあ… 今回はこの程度で
次回はもう少し多く入れたいですね。

カゲで友達のことを褒めてる奴が一番信用できる（前書き）

展開が早いけど、じつか気にしないで下をこ
とこつわけで、出来たので第7話いきま～す

カゲで友達のことを褒めてる奴が一番信用できる

少年はどうやら話す気になつてくれたらしいが彼の話を聞こうとする人はあまりいなくクラス全体を使つても邪魔になるだけなので、吹寄が当麻、土御門、インテックスを部屋の端の方へと追いやつた。そして、他のクラスメイトも「一端覽祭」の準備に取り掛かり、周りは釘を板に打ち付ける音や材木を切る音で騒がしくなつた。クラスメイトの中には「あいつらはいいのか?」と吹寄に尋ねる者もいたが、「もう好きなように生きればいい」と若干諦め気味に言った。確かにいきなり未来から来たとかいわれて信じる者なんてなかなかいないだろう。土御門も未来の情報が欲しいわけではない、ただ学園都市を影で暗躍する上で彼の正体が気になつただけである。当麻も彼が何者なのか気になつていただけで、未来から来たなんてこと実際はまったく信じていない。

「でつ…お前は何年後から来たぜよ?」

「22年後」

「カミyanを『父さん』って呼んだつてことは…」

「…はい…息子です」

少年のカミングアウトに当麻はただ啞然とした。いきなり『未来から来たあなたの子供です』と言わされて、『はい、そうですか』と納得できる人間はいないだろう

「…急に息子だつて…言われても」

「おいおい…かわいい息子の言つ事が信じられないのかにやー?」

「こきなりそう言われて納得できる奴がいるなら連れてこい…そし

て俺を納得させろ！」

当麻はもつともなツツコミを入れたが、土御門は無視して続ける。

「いや……でも氣にならないとせこまつあるじゃない……」

だから…未来の事は喋りませんって…！」

えー！？土御

「…………」

「いや……その……あんまり……父さんと……その……

少年は突然言いにくそうにモ「モ」モ「モ」を喋り出したが、突然ハツと何かを思い出したような顔をした。

「あつ！…もしかして昔父さんと一緒に3バカつて言われた！？」
「いや！…ちょっと覚え方酷いけどそれにやーーー！」
「あーーー聞いたことがあります…父さんが言つてました！」
「ほー！なんて！？」
「もし会つ事があつたら常に敬語を使って他人のふりをしろつて…」
「なんでだああああああーーーーー！」

叫ぶ土御門と対象に当麻は「ふしき！」とふき出した。そして、縛られる少年の頭に手を置いて、

「なるほど…確かにこいつは俺の子かもな…」「信用するポイントをこよツ！？」

周りの準備の音を書き消すほどどの盛り上がりになつていき、その空

気に入りたくなったのか
突然青髪が入り込んできた。

「ああもうーーなんかそんな騒がれるとワイも気にならんけーーー！
俺のことはどうやーーー？」
「えーと…青髪…あーーーそれならよく聞きましたーーー」
「へーなんてーーー？」
「あいつに会う事だけは絶対に避ける…無理なら即座に逃げろって
「なんでだあああああーーー！」
「おー…関西弁忘れてるわー」

土御門に続いて青髪が絶叫するなか、周りにいたクラスメイト達も
少し気になつて聞き耳を立てたのか、それを聞いて当麻と同じく
笑つてゐる者もいた。あの吹寄せさえもブルブルと笑いを堪えていた。
なんだかバカにされている雰囲気になつたので土御門は話題を変え
ることにした。

「ああもうーーもうそんな」とましいに「やーーーなんで君はこの世
界にきたにやーーー！」

土御門の言葉に少年はビックリと震えた。

「僕は…」

少年は言葉を発した後、少し黙り暫くすると当麻を見つめて告げた。
「僕は自分の存在を消すためにここに来たんです

カゲで友達のことを褒めてる奴が一番信用できる（後書き）

とつあえずここまでです。

なんかまだあんまりギャグがない気がするな～

子供は親に似るつて書つたが、あれ子供が親の真似してゐるだけだから（前書き）

書いたのですが、少し急いで書いたのでミスがあるかもしれません
できれば気にしないで下さい
そんな訳で第8話いきます

子供は親に似るつゝ言ひ方、あれ子供が親の真似してゐるだけだから

先ほどの穏やかな空氣と打つて変わり、クラスの者はみな啞然としてしまつた。

「自分を消しきつて…」

「それつてどういふことなん！？」

何時になく真剣な顔で土御門と青髪が尋ねた。しかし、少年は顔色を変えず淡々と続けた。

「簡単に言つて…父さんと母さんを結ばれないようにする為に來たんです」

暫く、クラスを静寂が包んだがそれを遮るように土御門が尋ねる。

「お前の母さんって…誰ぜよ？」

「言えません」

土御門に続くよつて今度は青髪が尋ねる。

「結ばれないよつてするつて…そないなことしたらお前さん…」

「ええ…僕は消えてなくなるでしょ」

クラスで一端覧祭の準備をしていたクラスメイトも話の重々を語つたのか、みんな静まり返つていて。

事の中心人物でもある上条当麻も話を聞いてるつゝ少年の本氣の

気持ちが伝わってきて、何をどうすればいいのかと、ほほ混乱にも近い状態になつていて。だがそれも仕方がないだろつ、突然未来から子供が来たと思えば、今度は自分を消したいだなんて頭の整理がつかなくて当然である。取りあえず当麻は混乱する頭を落ち使えるる為と色々情報を得る為に質問をすることにした。

「1Jの時代を選んだのは?」

「…………ここが父さんと母さんが結ばれるきっかけになつたところだからです」

「なるほど……だから、病院やら街角やらで色々邪魔してたって訳か

…

少年は言葉を出さずにコクリと頷いた。

「なんで自分を消したいんだ?」

少年は暫く下を見つめたままいたが、不意にポツリと呟く。

「母さんが……辛そうだからです」

「えつー?」

少年の言葉に当麻は思わずドキッとしてしまった。少年の様子を見る限り嘘をついてるようにも見えなず、少年がそこまで思いつめるほどのことを少年の母にしてしまったのかと、当麻は未来の事とは言え気の毒な事をしたように感じた。

「俺が……その……何かしたのか?」

「父さんの性格……いや性分の問題ですよ」

少年は下を俯きながら語り出した。

「父さんは何時も何かに巻き込まれては人助けの為に家を飛び出していくし、そして何日も家を空けて置くわ、行つた先では何人の女性とお近づきになつてバレンタイン、クリスマスつて信じられないお客さん（女性）がくるし、バレンタインの時だけで言つたら毎年毎年、信じられなう数のチョコ送られてくるし、一体どんな食べばいいんだつて、俺を糖尿病にでもしたいのかつてツツコミたくなるくらい死ぬほどチョコ食わされるわ…クリスマスには父さんに色仕掛けの為にミニスカサンタとかいつぱいくるから、ホントマジであれ…田のやり場に困るから、思春期の俺に際どいもの見せてんじゃねーよ…ホント腹立つ…」

途中からほほ呪文のように愚痴を唱えていた。

「取りあえず辛いんだな…」

答えたのは当麻ではなく土御門であつた。先を越された当麻は取りあえず落ち着いて

「いや…だからって自分を消そつなんて…」

「あつすいません今は僕個人の愚痴です」

少年は我に返つたように真面目な顔をして当麻を見つめた。

「僕は…父さんが家にいなかつたり、他の女性と仲良くなつたりしてるので見て寂しそうにする母を見たくないんです」

「…自分の存在を消してまで…お母さんを不幸にしたくなつてことか…」

当麻は半ば呆れ氣味だった、どれだけな母親思い、いやマザコンだ

ると口に出せずに心の中で思つた。

だが、そんな事を忘れるよつなことを少年はポツリと呟いた。

「それに…… 一人ぐらご奥さんが減つたって……」

「んつ？ どつこつ意味だ？」

突然の意味の不明な言葉に当麻は何か寒氣のよつなものがした

「いや、だつて…… 父さん、バツ8だから」

その瞬間、当麻は時が止まつたよつな氣がした。だが後に悟る、これは走馬灯だつたのだろうと。当麻があたりを見渡すと近くにいた土御門、青髪、インテックスにその奥にはクラスの代表とも言わんばかりに吹寄が立ちぬくしていた。

「おこづか… カミやんお前はそんなに女を乗り換えたのか？」

「よつ取り見取りか！？」

「とつとつま～」

「貴様アア…」

クラス中、いや今は学校中の殺意が当麻に向かつてゐるのではないかと思つぽどの痛い、視線と殺氣をその身に浴びていた。

「いやいや… ちよつと待つてくださいよ～ そんな… 吹寄さんまで… あなたこんな身も蓋もない事を信じられないと言つたばかりじゃないですか！？」

「たしかに… だが何故だか、信じられるよつな氣がしてきました…」

じつじつと近づいてくる彼のを当麻はなんとか落ち着かせようとしたが

「あーちなみに僕は3人目の奥さんの4人目の子供です」

「上級生の間で、おめでたの言葉をよく使われるんだよ。」

少年は火に油を注いだ。少年の言葉を合図にインテックスは当麻の頭に噛み付き、その当麻の頭を吹寄がヘッドロツクし、土御門と青髪はどこからか持つてきたりノゴギリとトンカチを当麻に向け不気味な笑顔を向けていた。そんな中、吹寄はこちらをジツと見つめる少年に気付き、当麻に技を決めながら少年に話しかけた。

「どうした？君の望み通り父親を消し去つてあげよう……！」

吹寄の言葉に少年はビクッ！と少し拳動不審になりながら慌てて答える。

「いやつ！あのくえうつと、あれです！吹寄さんつて結構美人なん
だなうつて思つてただけです！！」

少年としてはこの場を和ませる為に言ったのだろうが、それを言った瞬間、
また暫くの間、時間が止まつた。そして、吹寄は当麻のヘッドロッ
クをバツ！と解いて

今度は吹寄は標的を謎の少年へと変え、少年に襲いかかつた。

少年は吹寄にグーパンチで襲われ、それを避けようとジタバタすると不意に縛られていたロープが緩んでいる事に気付き少年は乱暴にそれを取り外し、慌てて今まさに襲われている当麻の手を握った。

「ハハハです！」

手を握られた当麻はほぼ反射のように握った少年に従い教室のドアに向かって同時に逃げし、上条達を抹殺しようとするとクラスメイト達を押し避け、廊下に抜け出すと2人は同時に叫んだ。

「「不幸だ～～～～～～～～！」」

子供は親に似るつて書ひたび、あれ子供が親の真似してゐるだけだから（後書き）

とつあえず二二までですが、急いで書いたのでまたその内書きなおすつもりです。

だけど、おかしな~なんだか誰か書いてない気がする~

なんか~いつ黒髪で長髪で巫女属性な~まいつか、もういねえだろ

お~お~（笑）

嫌よ嫌よも好きの恋つて恋ひたゞむが、あれつて粗手が云に恋るにじやね？（前編）

出来ましたので第9話行きます

嫌よ嫌よも好きの匂ひに聞ひながら、あれつて粗手がここに限るにじやね?

追手を振り切り何とか地獄と言ひの学校から脱出した当麻とその子供である少年は、今は大して人のいない公園のベンチで休んでいた。

「はあ～死ぬかと思った…」

「なんで僕まで…」

背もたれに寄りかかりながら顔を上に向けている当麻とは対照的に隣の少年は顔を下に向け息を整えていた。

その不幸そうな姿を見てみると、どうも自分の重なると思えるのは錯覚だらうか、

「あれは…お前が悪い」

「えつ！？いや！普通に褒めただけだと思ひにけど…」

「ああ言ひの嫌いなんだよ、吹寄は…他の奴らもお前にせいで悪乗りするし」

「悪乗り…あのが？」

少年は信じられないと言ひた田町麻を見つめた。

確かに先ほどの本当に死ぬかと思った状況をただ悪乗りなどで済ませるのはどう考へても無理だらう

「あいつが、皆ああ言ひのが大好きなんだよ…まあ俺は堪つたものじゃないけど…」

「なんてこうか……す」こですね

漸くたつて落ち着いてきたのか、当麻と少年の息はもう乱れていた。かつた。

「はあ……でつ？お前はどいつすんだ？」

「えつ？」

「また色々と邪魔すんのか？……まあどいつひじり俺は暫くは学校に行けないしな」

「それはそれで安心しますよ……またあの集団の中に戻るなんて言つたら一緒に行く勇気ありませんし」

少年は苦笑いをしていたがどこか安心した表情だった。

「なあ……お前ホントはどいつしたいんだ？」

当麻の言葉に少年はえつー？といつた顔をした。

「何がです？」

「お前……本当は自分が消えたいなんて思つてないんじゃないのか？」

「…………」

「お母さんの為だからなんだか知らないけど……お前が消えて解決する事なのか？」

少年は当麻から田を逸らして黙つたまま前を見つめた。そして、何かを言おうと口を動かそつとすると

「あんたッ！何してんの？」

突然、一人の少女が喋りかけてきた。少年にとつては初対面であり、彼の父にとつてはよく知る顔だった。

「よお…御坂か」

「あんた…今はど」の学校も一端覧祭の準備で忙しいって言つて
「こんな所でテートツて…」

呆れた顔の御坂だったが少年を見て意外そうな顔をした。

「あれ？男の子！？珍しいわね…あんたが男友達と一緒にいるなん
て…」

「何だよ？そのいつも女の子といるみたいな言い方は？」

「別に間違つてないでしょ？」

「御坂…さん」

突然、名前を呼ばれ思わず少年の方に視線が言つた御坂は少し考
ながら

「え～っと…誰？」

「…ん～と…俺の息子…」

先ほど逃げる為に使つた体力の為か当麻はもう一々言い訳を考え
のもいやになつて御坂に対し投げやりに言つた。それを聞いた御
坂はもちろん

「はあ～？」

当たり前の反応を取つた。もうほとんど分かっていたので当麻は氣
にせず面倒くさがりに続けた。

「いやーホントなんだよ22年後から俺の息子でさ～こいつがギャ
ーギャーうるさいからここで一人つきりで話し合つてたわけよ」

「あんた…バカにしてんの？」

御坂は当然の対応と取った。バカにされてると思った御坂は当麻に詰め寄る。したが

「ああ……ビリビリの事か…！」

突然大声を出した少年に御坂はピクシと反応して少年の方を向いた。それに遅れて当麻が少年の方を向いて尋ねた。

「なんだお前、御坂のこと知ってるのか？」

「ええ…父さんよく話してくれましたよ…よく自分を殺そうと襲つてきたビリビリ女のこと」

「…」

御坂は声が裏返るくらい驚いた。しかし、当麻大して気にせず続けた。

「へーそれはよく聞いたのか？」

「ええ…それはよくわりと、何度も殺されかけて…あいつと会つといつも憂鬱になつたつて」

当麻と少年の話を聞いて御坂は口をパクパクさせながら啞然としていた。

「あーやつぱりー」

「話してる時の父さんも辛そうでしたから…でも全然普通のかわい子じゃないですか」

「そりや大人しくしてる分にはいいよ…でもお前会つたび会つたび電撃を浴びせられてみなさいよー

もうあの姿も鬼にしか見えないって……

「へー当たり前だけど今の父さんも同じ」と言うんだ……父さんもあんなの付き合つたら酷い目に会つだらうって言つてた

一人は黙々と会話を続けたが、ふと御坂に眼をやると何やら下を向く御坂からバチバチと激しく電気が漏れ出している事に気付き、耳を傾けてみると何やらボソボソと呟いていた。

「何よ…そんなに…私が嫌いなわけ…そんな子まで使って…迷惑なら言えばいいじゃない…近寄つて欲しくないなら…やつと言えばいいじゃない」

「いや……あの……御坂さん？」

当麻が恐る恐る声をかけると御坂は下げていた顔をバツと上げ、その眼に溜まつた涙を一人に見せつけた。

「ウワアアアアアアアアアアアアアン！！！！」

泣いているとも叫んでもいるとも怒っているともそれる声をあげて全身から信じられないほど電気を発した。

「ギヤー！！！何なんですか！？父さん！！あの人突然！？」
「よく分かんねえけど、たまに訳分かんない事になるんだよ！！」

大量に発生する電撃の中から流れ弾のように当麻達に向かってくる電撃を当麻は右手でかき消しながら走りだしそれに続くように少年も走り出した。

「「不幸だー！！！」

本日2回目の意氣投合であった。

嫌よ嫌よも好きの恋ひに恋ひに嫌よ、あれって相手が云に恋るにじやね？（後書き）

と云ひ訳でたぶんこれからいろんなキャラを出して
謎の少年と関わらせていただきたいと思います。
そんなこんなで今回はじまりまでです。

モテモテの主人公ってなんだが当たり前の様な気がしてきた（前書き）

出来たので載せます

モテモテの主人公ってなんだが当たり前の様な気がしてきた

公園に居られなくなつた二人は今度はトボトボと街をぶらついていた。

電撃のせいで少しばかり服が焦げている一人を周りの人たちは以上に見えたのか（結局のところ異常である）誰も近づこうともしなかつた。

「くそ…なんで今日ばかりこんな目に」

「なんで僕まで…」

「オメーがいろいろ言つたからだろ！」

「なつ！？父さんだつて頷いてたじやないですか！？」

見た目は同じ年だが実際には父と子、これくらいの口げんかは普通なのかもしねないが

実際にやつている本人達を目の前にするとこれもまた異常である。誰も声をかけないとたかを括つていたが、

「あれ？…上条当麻？」

急に後ろから声をかけられ振り向くと一人のクワガタのような髪型の男が立つていた。

「あれ！？建宮！？」

「やっぱりそうか！…おーい！女教皇！五和！みんなもこつち！…」

建宮が振り向いて後ろに向かつて声をかけると数名の男女がぞろぞろ

ろと近づいてきた。

そして、その中でも当麻がよく知る一人が近づいて話しかけてきた。

「久しぶりですね…上条当麻」

「どうも…」無沙汰します…！」

話しかけてきたのは建富の上司である神裂火織と同じ天草式の同僚である五和であった。

「神裂！五和も！それにみんなも！…どうして…？」

「なにを言つてるんです？あなたが招待したのでしょうか？」

「一端覧祭つてすごいお祭りがあるから来てくれって！」

二人の言葉に当麻は少し考えた。確かにイギリスで働く彼らと他の何人かの世話になつた人々に手紙で招待した覚えがあつた。

「あーそういうえば…確かに言つたけど、一端覧祭にはまだ5日あるぞ」

「長い休みを取れたので今朝こつちに…今はあなたに挨拶に行くとともにに皆で少し見て回つてたところです」

「そうか…」

当麻が平たんな返しをしてみると神裂が当麻の隣にいる少年に気付いた。

「あのそちらの方は？クラスメイトですか？」

神裂は当麻の隣にいる少年が当麻と同じく少し焦げているのを見て友達と思つたのか、何気ない感じで尋ねてきた。もつ当たり前のような質問なので当麻は敷から棒に答える

「あー俺の息子」

「「「「はあ?」」「」」

本田まだ2回田だがもはやお馴染と重つてもこいであれひれ心、当
麻は慣れたよつに続けた。

「こやー22年後から来た俺の息子ドセー今一緒に不幸な田にあつ
たところから逃げ出してたところなんだよ…」

「うせ、信じられないだろ?」田麻は、ほほやけくそ状態だった。が

「学園都市とはそんなことも出来るのですかー?」

「あれ!?」

予想外の反応に当麻は思わず声を出した。

「学園都市は科学が進んでこるとは言へー・またか時の壁を乗り越え
られるなんて!…」

「さすが学園都市よな!…」

「こやつ…あの~」

あまりの予想外っぷりに当麻は思わずたじろんでしまい、何とか天
草式を落ち着かせよつとしたが

「あなたは誰の子なんですか!?」

あまりの興味津津の五和に圧倒され当麻は言葉を挟むタイミングを
失った。

「いえ…あの～やつこつ」とはあまり言えないんですが…」

少年も田を輝かせる五和に戸惑いながらも自分が取るべき対応を取つたが、

「じゃあれですよね！？私の子と云ひの可能性もない訳ではないんですね！」

五和は少年の手を握り、圧倒的存在感で詰め寄つてきた。

「いや…少なくともあなたの子ではないですよ…」

本来言つていい事かは分からぬが、あまりに期待の眼差しを向け迫る五和に押され少年は思わず本当の事を言つてしまつた。

「やつですか……」

急に落ち込んだ五和を見て、何か思ひと云ひがあつたのか慌てながら少年は五和に声をかけた。

「あつーでも父さんバツ8ですかーーーもしかしたらあなたもその中にいるかもしませんよーーー！」

当麻はここつはまた余計な事を…と思い、殴つて叱つたと思つたが

「ほんとですかーーー！？ーーー？」

再び、いや先ほど以上に田をキラキラさせる五和を前にして、なんか面倒な事になりそうだ…そう感じた当麻は

「ああーもつ……お前は事を複雑にするからもう喋らんな……」

「そう言って当麻は少年の首根っこを掴んで、その身にあるすべての力を使ってその場から離脱した。

「おーおー……バツ8つでどんだけだよ……なあ五和……」

逃げ去る当麻達を見送りながら建宮は五和に語りかけたが、

「私がいつ結婚するかは分かりませんけど大丈夫です、例え捨てられても子供達は私が責任を持つて育てます！」

五和は当麻達がいなくなつた事にも気付かずに両手を頬にあてながら腰をくねくねと動かしていた（なんだか動くたびにハートが出ている気もする）。そんな、五和を見た天草式はアックアと戦つた時以上にの息を合わせながら同時に呴いた。

「……駄目だコイツ何とかしないと……」「

モテモテの主人公ってなんだが当たり前の様な気がしてきた（後書き）

え～すいませんでした！！！

五和ファンの皆さん、

なんかキャラくずれしてる気もしますが

まあ所詮は素人なので気にしないで下さい。

アクセラレータには悪いけど、やつぱりアクセロレータつてつまご事話つなあ。

短いですが出来たので載せます。

今 回 は 一 方 通 行 登 場

アクセラレータには懸念材料、やまびこアクセルレータについてもこの事につながる

10分近く歩き続けただろうか、当麻は少年が離れないように首元の襟を掴んでいると不意に少年が立ち止った。振り返ると少年が疲れのようすに肩で息をしていた。考えてみれば今日一日でどれだけ全力疾走したのだろう、当麻自身も疲れていたのでこれ以上少年を引つ張るのをやめた。

「はあ……まつたく次から次へとお前は…」

「…………すいません」

さつきみたいに言い返してくるかと思つたが少年はあつそり謝つてきたので少し拍子抜けしてしまった。

「もうお前未来の事、なんも喋んな…全部面倒な事になつそりな気がする」

「僕もさつ思ひので…もう止めときます」

少年も漸く悟ったのか、ウンザリしながら答えた。

「あアン?何してんだオメハ?」

またも、声をかけられ嫌な予感がしたがほつておく訳にもいかず当麻は振り向いてみると、これまた珍しい人物がそこにいた。

「一方通行！まさかお前にまで会いつとは……」

当麻に声をかけたのは白い白髪が目立つ学園都市最強の能力者「一方通行」^{クセラレータ}であった。因縁と言つてもいい関係である一人だが、そのまま戦いを行わないところを見る限りある程度、互いに理解し合つて、少しほはマシな関係になつてていることが窺える。

「アクセラ…レータ…」

一方通行の名を聞いた少年は何を不思議そうに呟いた。

「なんだ？知らないのか？」

「いえ……誰かから似たような言葉を……確か……アク……アク」

何かを思い出せそうだと同じ言葉を繰り返し呟いていると

「おい誰だコイツ？」

それを見て、奇妙に思えたのか一方通行が尋ねてきた。

「あーただのクラスメイトだ…」

もう説明するのもやになつたのか当麻は嘘をつくことにし、そのまま事なきを得よつとしたが、

「ああ……思い出した!子供好きの『アクセロワータ』……」

少年がそつと言つた瞬間、時が止まつた。そして、その後確かに何かがブツンッ!と切れる音がしたのは氣のせいか、そんな、事を確かめる間もないまま

「……テメエ……誰のことだアアアアア!……コラアアアア!…!
!」

めつたなことでは彼の背中から出てこない黒い翼がドバッ!と勢いよく出るとこから察するにござつやらめつたな事が起こつたらしい。

「ダアアアア!……もつ!……イヤアアアアア!……!」

本日4回目の全力疾走…

アクセラレータにて遷じて下さい、やつぱりアクセラレータにてついで事前につながり

短いな

そう思いながらもなかなか会話を増やすことができませんでした。
やつぱり一方通行はボケをさせずらい

男はドン・ミー構えてる（前書き）

小説とは不思議なもので書いているつまら別のものアイデアが出てきて
今度はそれを書きたくてしうがなくなる
しかし今は田の前の作品を仕上げることに集中します。
それでは12話こまます

男はドンッと構えてる

先ほど登場した、今まで当麻の出会ったミーシャ、風軒、そして墮天使エロメイドこと神裂火織並みに印象に残るトンでも「天使」天使とはかけ離れているが、一方通行から逃げ延びた一人は先ほど御坂美琴と会った公園とは別の公園に行きつき、そこで見つけたベンチに

ただ黙つて座つていた。

「…………すいません」

不意に少年が下を向いたまま当麻に言った。

「何がだよ……」「いや……こらこらと……」

少年の顔は見れないがおそらく申し訳なさそうな顔をしているだろうと感じた。

「ホント疲れるよ……」

文句を言つよつと口調で言つたが、その後、空を見上げながら呟いた。

「まあでも……アレなんじゃね？子供に振り回されるのも親の仕事なんじやね？」

当麻がそう言つと少年は当麻の顔を唖然とした様子で見つめた。そ

してまた

「あれ？上条か？」

誰かが当麻を呼ぶ声がしてきた。当麻はまた何か面倒な事になるのではと思つたが声をかけた人物をみて少し落ち着いた。

「おう…浜面に滝壺か…こんな所で何してんだ？」

「滝壺がある程度出歩けるようになつてな…ちょっととした散歩だよ」

「ああ…病院この近くだったのか…体調はいいのか？滝壺…」

「うん…もう大丈夫…」

ピンクのジャージを着た大人しそうな少女、滝壺は答えた。今まであつた人達の中で一番何事も起こりそうもない一人会つて、当麻が少し安心していると

「浜面さんに滝壺さん…！」

当麻の隣にいた少年は急に声を上げ浜面に近付いた。

「うわああ！…す、…！…浜面さん僕と同じくらいの背だ…小さな

」

急に浜面の前に來たと思つたら、右手で自分と浜面の身長を比べだした。

「えつと…はあ

まったく身に覚えのないアカの他人に浜面がたじろんでいると

「ははっ……滝壺さんも……」

今度は少年は滝壺の前に立つて、滝壺の顔をまじまじと見つめた。

「やっぱり未来とは違うな……なんだか綺麗つていうよりかわいいって感じだな」

今まで未来に影響がどうのいつのいつに話していったわりに饒舌に話しだす少年に当麻が啞然としていると

「かわいい……」

どこか照れているような表情のまま次々滝壺を目に少し焦った様子で浜面が大声で尋ねた。

「なっ……おい上条！ 何なんだ！？」

「え……っと、俺の息子」

「…………はあ？」

今度は当たり前の反応が返ってきたが、もう慣れてしまった当麻は浜面に説明するよりも先に少年に尋ねる事を優先した。

「お前……浜面のことは知ってるのか？」

「ええ……よくお一人にはお世話になりましたから……」

少年は笑顔で答えながら、浜面達と向かい合つた。

「浜面さんは昔喧嘩の仕方も教えてもらつた事もあります」

少年にとつての過去とは自分達にとつての未来であるので今の浜面

にとつては勿論身に覚えのない事であるが

今だ状況が掴めていない浜面はこんな少年に何かを教えたつける?と言つた顔になつた。だが、そのような考えも吹つ飛ぶような事を少年が言いだした。

「それ一人の子供とも仲良く遊んで!…………つあ

少年は漸く色々べらべらと喋りすがきたことに氣付いた。

「なつ……何言つてんだ!?子供オオ!?」

理解をするのに時間がかかつためであるつか浜面は叫ぶのに数秒かかった。

「ああ……またお前は!…ほら行くぞ!…じやあな!浜面!…滝壺!…」

「面倒な」とになるのでは。と考えると同時に当麻はこれ以上少年が余計な事を言つのを恐れ、また首元の襟を掴んで引っ張つてどこかへ走つて行つた。

(上条の野郎!…一体何だつてんだ!?訳のわからんねえこと言つて勝手に消えやがつて!…なんか変な空氣になつてゐじやねーか!?)

残された浜面は言葉に出さないが、なんだか滝壺の出す何時もと違う雰囲気を感じどうしそうかと頭をフルに回転せていると

「ねえ……はまづら

少しパニクッてる浜面を知つてか知らずか今まで黙つていた滝壺がいつものおつとつとした口調で話しかけてきた。

(落ち着け！－浜面仕上－－じつこう時じんや馬はドン－と構えてお
くべきなんだ－－)

心の中の会議でじつするか決めた浜面は

「じつした？滝壺…」

おそらく絹旗がいたら「超キモイ」と一刀両断されそうな笑顔を向
け、決してうるたえず驚かない事を誓い滝壺に尋ねると

「はまづり…………子供は何人欲しい？」

「それずっと考えたのぉ～！？！？」

僅かに頬を赤らめながら尋ねる滝壺に浜面の決意はホンの1秒ほど
で砕け散り、浜面の叫び（ツツコウ）が辺りに響いた。

男はドンッと構えてる（後書き）

以上です。色々と考えた結果これはあと4・5話程度で終わります。
「当麻VSローマ・学園」に比べればあ短いですが
書いていてとても楽しい作品です。
あと少しですがどうぞよろしくお願いします。

えつー・ああつづつもへこねかあたる? だつて作り話だもん (前編)

題名通りです
では1~3話いきます

えつー？あまつじつもへこむすあむじる？だつて作り話だもん

今日一日で一体どれだけ走ったのだろう、そつ疑惑に思えるほど走りまつくな一人は

田も沈みかけて、あまり人通りのない道をトボトボと歩いていた。

「はあ……結局今日一日走つて終わつちまつたぞ」

「なんか…すいません」

「なんかじやねえーよ……完璧にお前が悪いんだからちゃんと謝れ……」

一人は先ほどから似たような事を繰り返し会話し続けていると、不意に少年が立ち止った。

「どうした？」

「いや……なんだか…何やつてんだろつて思つて」

少年はため息交じりに呟いた。

「色々覚悟したつもりで来たのに…実際には…」

「わつきも聞いたけど…ホントにお前は消えたいのか？」

「……消えたいとか、そういう事じやなくて…僕なんかいない方がいいじゃないかって…」

「誰がそう言つたんだ？お前の母さんか？」

「…………いや…だれがつて訳じや…」

「わつきも言つたけど、きっとそれつてお前が消えて解決する事じやねえと思つた…」

少年は当麻の言葉に何も言い返せないままいると、突然二人の前に2メートル近くある巨大な物体がズシンッ！と落ちてきた。しかも、それは一つではなく2つ3つ次々に現れ、最終的には5つ目まで現ってきた。事態が掴めない二人だつたが、落ちてきた物をじっくりと見つめそれが手や足、頭らしき物も見え、少し考えた後それロボットである事に気付いた。ロボットは一人をジッと見つめるとその機械で出来た腕を一人向かって向け、その手から何かを放つた。放つたものは一人の間を針を通すかのように抜けて二人から10メートル以上離れた所に飛んでいくと、それはドカン！と言つ爆音と爆風と共に爆発した。二人は反射的にロボット達がいる所から逆の方に逃げるよう走り出した。

「なんなんですか！？あれ！？」
「わからねえ！…とにかく逃げるぞ…。」

土御門元春はとある窓のないビルを訪れていた。ビルの中は暗く部屋の中央には赤い液体に満たされる円筒があり、土御門はその前に来ると怒鳴つた。

「おい…どうにいつてもりだ…? あんな街中に『駆動鎧』の部隊を放つなんて…?」

「君は知つてゐるだらう? 「幻想殺(イマジンブレイカ)」と

「あの上条当麻の息子とか名乗つてゐる奴か！？」

「今の学園都市には未来と過去をつなぐ技術などないから、信憑性

には欠けるが… その少年 자체は確かにこの街には存在しない

「本当に未来から来たとでも？」

「分からん… だが、妙な干渉は計画に影響がでるかもしれん… だから彼には」

「上条当麻はどうなる！？」

「安心しろ… 彼を死なせるようなことはしない」

~~~~~

二人は人気のない、廃ビルの多い町を走っていた。そこを走った理由も先ほど見せつけられた攻撃の影響である。今、一人を追つてきているロボットのような集団は先ほど人気が少ないとは言え街中で爆発物を使ってきた。どういう経緯で一人を攻撃してくるか分からぬが、とても人気の多い街中を通れば攻撃を躊躇してくれるとは思えなかつた。そのため二人は出来るだけ人気のない廃ビルが並ぶ通りをひたすら走つていた。

（たくツ！！ 何だつてんだ！！ クラスマイト達に御坂に一方通行、さらにこいつらってどんだけ殺されかけばいいんだ！？）

当麻の頭の中は完全にパニックになつていたが、何を言つても始まらない、いやもうすでに始まつてることをどうしようもない事を悟り、ただ、黙つて逃げる事に専念した。相手はすごいゴツイ印象を与えるロボットであつたが、その動きは非常に早く一人は先ほどから何度も先回りをされ、その度に薄暗い狭い路地に何回も入つていくことになつた。狭い路地なのでロボットは入つてくる事は出来ず、何とか巻く事は出来たが突然、一体のロボットがその腕から先

ほど一人に見せた攻撃を今度は一人の近くに向かつて打ち、その爆発で一人を吹き飛ばした。

「ワアアー！！」

「ダアアアー！！！」

当麻と少年は爆風で壁に叩きつけられた。当麻は意識を失いかけたが、彼の前に倒れる少年にゅつくりと近づくロボット見て、それが何をしようとしているか悟り、当麻は近くに落ちていた鉄パイプを拾つて、ロボットに近づきその頭めがけ鉄パイプを振り下ろした。かなり力を込めたが当麻の攻撃はガキンッ！と鈍い音を立て、その腕に鈍い振動を伝えるだけだった。ロボットは殴りかかった当麻に腕使ってなぎ払うように吹き飛ばした。

「ガアアー！！」

再び壁に叩きつけられたが、少年に向かつてその腕の銃を向けるのを見た当麻はすぐに立ち上がり少年のもとに行くと覆いかぶさるように盾になつた。

「父さん！！」

『『『ディテクダサイ、アナタへノ、コウゲキメイレイハダサレティマセン』』』

「ふざけんなア！！！」

機械電子音でたんたんと述べられる言葉に当麻は怒りを露わにし大声をだした。

「逃げて父さん！！攻撃しないって言つてるんだ！！早く逃げて！！！」

「ふざけんな……」

当麻は先ほど見つけた鉄パイプをロボットに向けて構えた。

「なんで？ 父さん…あなたは何時も…何時も」  
「ぐだらねえ事聞くんじゃねえよ！ お前がピンチだからに決まって  
んだろ！？」

少年はハツ！ とした顔で自分の前に立つ当麻を見つめた。そして、  
当麻は続ける。

「第一…自分の子供がピンチなんだ！！ 親がガキの為に命を張るの  
にそれ以上の理由はいらねえ！！」

決して逃げない当麻に少年は感謝のよつた感動の気持ちで胸がいつ  
ぱいになつたが、そんな二人をあぜけ笑つように一人に向かって銃  
を向けた。今の当麻の手には決してこの事態を覆すよつなどんでも  
ない力がある訳でない。だが決して当麻は逃げよつとしなかつた。  
そして二人が死を覚悟した、その時

「見つけたぞオオオ！！！」

救いの神、いや破壊神は突然現れる。

「さんざん捜させやがつてエエエ…」  
『アツー・アクセラレーター！？』  
『ナンデー・コンナヤツガ！？』  
『ノリウヤ・ノリウヤ・ツルセえ！… わつわと殺らせるわわわ…！…』

ギヤアアア… と音の響き声となんだがドロー・バロー… といろんな物

が壊される音が響く戦場を前に

「…………」「…………」

「…………まあ……なんだ……あきらめなきやべりにかなるものんだ……」

あまりに出来すぎた話に黙然としながら取りあえず麻は場を和ませようとした。

えつーへおまつりもへこわすかわいへだつて作り話だもん（後書き）

いろいろ迷ったのですがここはグダグダやつても自分じや面白戦いを書けないと思ったのでサクッと終わらせました。前にも書きましたが今自分の頭の中では新しい話が出来ていて、それを書きたくて仕方ありません。だから、ここはひとと終わらせるにしました。

女を口説く時はシチュエーションを大事にしろ（前書き）

正直前回はなんだか書きずらかった。  
でも今回はずっと頭の中で考えていた話だったので  
スラスラ書くことが出来ました。  
そんな訳で14話行きます。

## 女を口説く時はシチュエーションを大事にしろ

当麻達に襲いかかってきたロボット達は一方通行相手に5分も戦い続けると言つ快挙をやつてのけ

その隙に当麻は少年を背負つて全速力でその場から離脱した。本日これが最後である事を願い当麻はひたすら走り、最終的に脇に御坂に会つた公園へと戻つてきた。

「だあ！…もつ無理！…これ以上走れん！…」

背負つた少年をベンチに下ろすと当麻も倒れるよつてベンチに座つた。

「大丈夫？父さん…」

「これを見て大丈夫に見えるなら眼科行け！…」

最早はあはあなどと言つ息の仕方ではなく、ぜいぜいと乾いた息をする当麻を見つめ少年はフツと笑みを漏らした。

「父さん…その…ありがと」

「ああ？礼だつたらアクセラレータに言え…恨みつて言つのも意外と買つとくべきだな…」

「いや…そうじゃなくて…ほらなんて言つた…見捨てないでくれて…」

「ああ？別に大したことねえよ…それに当たり前だろ…お前は…俺の子なんだから」

「どうやら無事のようだなカミちゃん…」

もう人気のない暗い公園の奥から当麻の良く知る男が現れた。

「土御門……」

「アクセラレーターも役に立つもんだ」

「お前か？あいつ呼んだの……」

「いや……居場所教えてだけで顔色変えて飛んで言つたぜよ」

「どんだけ恨んでんだよ……と呆れてはいるが結果的に助けてくれたアクセラレーターに心の底から感謝していると、土御門が少年の方を見て喋り出した。

「さてと少年……上はお前を不法侵入として扱つてるぜ……わざわざ家なり未来なり帰つて方がいいぜよ」

「そういうことらしいぜ……死にたくなかつたらわざと帰れ」

「そうしますよ……」

「……何だか素直だな」

「いえ……なんだか、死にそうな目にあつて漸く自分は消えたくないんだつて知る事が出来ました」

少年の皮肉ですねと言いたげな顔を見て、当麻は

「なあ……もうお前消えたいなんて思わないよな？」

「…………えつ……？…………多分」

「はあ……じゃあこいつよつぜ……お前は自分がいる意味があるのかつて言つたよな？」

「…………はい」

「だったらこいつよつのじゃ駄目か？俺は……お前に生きていて欲しいんだ」

「えつ……？」

「未来の俺がお前をどうしたいかなんて俺は知らねえけどさ……少な

くとも今の俺はお前に死んで欲しくないんだよ

「父さん…」

「お前がそんなに思いつめるまで、ほつたらかしにしといて…自分勝手な親だとは思つけど…やつぱり自分の子供が「消えたい」なんて言つのは…俺は見たくねえんだよ」

そう言つて少年を見ながら笑つ当麻に少年もつらがるよつて笑みをこぼした。

「色々大変な目に会つたけど…でもここに来てよかったです…こんな風に父さんとじつくり話した事なかつたから」

「何ぜよそれ？その割になんか恨んでるよつた感じだつたぜ…」

「あーそれは」

少年は何かを思い出したのか先ほどの笑顔とは違つ苦笑いを浮かべながら

「だつて…僕がついてないのは父さんの遺伝だつて…母さんが」

「あー…」

「おー…なんだその納得みたいな相づちは…？」

当麻が若干の憐れみとやつぱつと言つてこるよつた目を向ける土御門にツシ「ノミを入れてこると、突然少年が立ちあがつた。

「じゃあ…僕行きますね」

「ああ…つーか未来つてどうやつて帰るんだ？」

「別にそんな大それた物で帰る訳にはありません…でも帰るとこ見られる訳にはいかないので…お一人はここにいてください」

「分かった」

「にやーさつと帰つた方がいいぜ…アクセラレータに見つかっ

たら厄介になるぜよ」

少年はハハツと笑いながら立ち去ろうとする少年を

「なあおい！」

当麻が突然呼びとめ、近づいた

お前の母さんに伝えてほしい事があるんだけど……

卷之三

当麻は少年の肩に手を置くと口を耳に近づけ何かを呟いた。

「なつ！どうして分かつたんですか！？」

驚く少年に当麻は頭をかきながら面倒くさそうに答える

ううん… そ、うたな天草式の連中に会つたぐらしからかな… お前… 顔の輪郭とか髪型は俺に似てるけど… その眼… 母さんに似てるな「

なんたはれてたんですか

一九四九

まつすぐと少年を見つめて語る当麻に少年は一言だけ告げた。

「ありがとうございます、父さん」

それだけ言うと少年は暗い公園の奥へと走つて行き、ホンの数秒立つとその姿は闇に消え見えなくなつた。

少年は先ほどまでいた暗い公園とは違つ、もつと明るく日光が指す、木が生い茂る広い公園の様な所に立つていた。

「見つけた」

ボーッと立つていると不意に後ろから聞き覚えのある声に振り向くとそこに彼の良く知る人物が立つていた。

「母さん…」

「またぐど二行つてたのよ?」

「えへつと…ちょっと父さんに会おうかと…」

少年の言葉に母はピクッと反応したが、心地やあまい本音にしていないらしい。まるであしりつのような口調で彼に尋ねる。

「そう…会えた?」

「うん…まあね… そうだ!…忘れる前に父さんから伝言…」

「伝言?」

「そつ…使いもしないのにあんまり通販で買い物するな!…だつて…」

なつ!…と驚く母の顔を少年は先ほど父に見せたものと同じ笑顔をしながら見つめた。

まだ人も全然来ていらない学校に当麻はわざわざ朝早くから訪ねていた。人気のない廊下を通つて教室に行き、ドアを開けるとまだ誰もいないと思っていた教室に一人の少女の姿があった。

「よお…朝つぱらから」苦労だな…」

「なんだ…貴様か…」

教室にいたのは吹寄制理、学校などで行われるイベントでは進んで運営委員なるというイベント大好き少女であり、今も誰も来ていない教室で一人、黙々と準備を進めていた。

「まつたぐどつかの誰かさんのおかげで準備が少し遅れてしまつてな」

「……誰でしょうね…ホント」

まだ色々と言いたい事はありそつだが、どつやら吹寄はそんな事よりも準備に取り掛かりたいらしい、入つてきた当麻を無視し再び何やら飾り付けの準備をし始めた。

「手伝うぞ」

何気なく言つたつもりだったが、吹寄は意外といつよりは驚いたような顔で当麻を見つめた。

「何時も邪魔ばかりの貴様がどついう風の吹きまわしだ?」

「まあ…たまにはいいだろ」

当麻は自分の机に鞄を置くと、吹寄の飾り付け準備に加わった。

「なあ吹寄……ちょっと俺のお願い聞いてくれないか？」

「やだ」

即答だつた。最早ここまで早ことシシ「マム」とそれをせんへりいの早さであつた。

「……そういうなよ……あの「一生のお願い」使うから

「ジュースは奢らんぞ」

「一生のお願い」使つてもジュースも飲めないんだ……俺……まあ大した事じゃねえんだよ……あの～今から俺が言う事に絶対に怒らないつて約束してくれ

「いや、それだけの為に「一生のお願い」を使つなんて貴様何を言うつもりだ？」

「えへっと……お前を口説く」

「…………はあ？」

「いや……違つた、その前にシチュエーションから作んないとな……」

吹寄は事態を飲み込めなかつた為、当麻が一番恐れた殴りかかるといつ事にはならなかつた。といつよりそこまで思考が回つていなかつた。そんな吹寄に構わず当麻は続ける。

「あ～取りあえず吹寄、一端覽祭が終わつたら一緒に遊園地行かないか？」

## 女を口説く時はシチュエーションを大事にしろ（後書き）

以上です。ちなみになぜ吹寄を選んだかと言つと  
ただ単純に俺が好きなだけです。すいません  
まあでも、なんやかんや言つて  
まあでも、なんやかんや言つて

当麻と一番仲のいい女子は御坂か吹寄だと思つて  
なんか、喧嘩が多いけど友達ってなんかよくね?と思つてます。  
まあそんなこんなで気付けば14話もやつていたこの作品もこれで  
次回で最後です。もう新しい作品の構想も出来ているので  
また近いうちに新しい作品も出します。  
それもこれと同じコメディ系です。  
ではまた今度。

楽しい学園祭と『俺達の戦いはこれからだ…』（前書き）

書きましたが、色々「コタ」「タ」しきりだったのを  
一気に書き上げました。だから展開が変に早いです。  
また気になることがあれば書きなおします。  
そんな訳で最終回いきます。

楽しい学園祭と『俺達の戦いはこれからだ…』

5日後…… | 端覧祭当日

「「「おかれりなさーい！－！あ・な・た！－！」」

「いや…あなたじゃねーし

当麻に招待されいった部屋での御坂の第一声はそれだつた。教室の部屋を開けるとそこにスタンバッていた白いドレスに身を包む少女達にそう言われれば

そのような事を言つてもなんら不思議ではないが、御坂は学園祭で仕方なく（多分）やつている彼女達に冷たく言い放つてしまつた事を公開するよりも、

まずこのクラスは何をやつてているのかを考える事に思考を回した。そんな御坂にクラスの3分の1ほど改造して作られた奥の方にあるキッチンらしき所から、

彼女の良く知る人物が声をかけてきた。

「よお！御坂、来たか！！」

「いや…来たかじやなくて…なにこれ」

「見て分かんねえか？女の子の一生の憧れを叶える『ウエディング  
喫茶』だよ」

御坂が見渡すと先ほど声をかけてきた3人以外にもクラスの中には7人ほどの純白のドレスに身を包む少女達が接客に明け暮れていた。

「ちなみにドレスは舞花が作りました」

「一体誰のセンス?」

「仕方ねえだろ… ジャンケンであいつらが勝っちゃったんだから」

当麻が指を指す先には当麻と同じく3バカデルタフォースの残り2名である青髪に土御門がいた。

「ニヤーーーウエーティング萌えええ！ーーー！」

「パシャっとなー」

奥の方でなにやら情熱を持て余している一人を見つめながら、当麻と御坂の二人は同じような呆れた目で一人を見つめた。

「完璧に趣味ね…」

「違えよ… 欲望だよ」

二人はまた暫くバカ二人組を見つめていたが、取りあえず当麻が誤解を解くように説明した。

「でも… 女性陣は結構乗り気だつたぞ… 流石、舞花様だけあって、衣装は可愛く出来る」

「まあ確かに動機はどうであれ… 衣装はよく出来るわね」

御坂は改め店員達が着る衣装に目をやつた。彼女達が着ているドレスは本物の結婚式で使われてもおかしくないくらいの出来栄えで、それでいて接客をしやすいように動きやすそうな印象を「える、まさに舞花さまさまなすごいドレスだった。

「おー！貴様ら何をしてる… さつさと厨房へ戻れーー！」

自身の欲望をむき出しにしている青髪、土御門に吹寄がゲンコツを顔面、頭にぶち込み大人しくさせた。

「吹寄、お前は着ないのか？」

「別にいい……着たくないし……私は裏方で十分だ」

なんてたゞ似合ひそこのに

当麻の台詞に吹寄はピクッと反応すると即座に当麻に近づいて来て、先ほど青髪たちにもやったゲンコツ攻撃で当麻の頭に吊きつけた。

「いつたあ？」

心のこゝに吹き寄せたのが顔を赤くし教室から出でて行った。

「へ～いつと…まつそつこう訳だ、招待しといてなんだが後は勝手にやつてくれ

「あ、うん…」

先ほどの一人のやり取りになんだか疑問を持ちつつ御坂はテーブルへと案内する店員に従つて黙つて席に着いた。

教室の奥にある厨房では裏方を任せられた男達数名と女子が次々に来る注文に慌ただしく対応していた。

そんな中で当麻、青髪、土御門は厨房の隅でどんどん積み上げられる皿を黙々と洗っていた。すると段々退屈になつたのか土御門が声をかけてきた。

「「いやーーー力!!やさーーー一体何をしたせよーーー。」

「何がだ?」

「何がやあらへんー吹寄の事やーーー。」

「だからなんだよ」

もう手を止めて話しかける一人をあしらうように当麻は皿を洗い続けた。

「なんか最近吹寄の態度おかしくあらへんかーーー。」

「どーがだよ? いつも通りだろ… わつきも殴られたし」

「「いやーーー違うこやーーーなんかつまく説明でないけど… なんつか… フハッとしてるこやーーー。」

「やうやーーーなんかうつうつうつうんやーーー。」

「いや抽象的すぎて分かんねえよ…」

訳のわからん事を言ひつくる一人を適当にあしらう、皿洗いを續けてこると

「上条君ーお箸をとーーー。」

~~~~~

「よつーー上条当麻ーーー。」

「先日はざつも」

「遊びに来ました！」

「建富！神裂！五和！みんなも」

上条達のクラスに一度に7・8人で押し寄せたのはつい数日前にあつた天草式であつた。

「いや～なんか面白い事やつてるよな！」

「まあ…ほとんど趣味だが」

教室の中で働く女子生徒達を見ながら素直な感想を述べる建富に若干の苦笑いを浮かべながら答えると

「でも可愛いですねウエディングドレスって」

と女の子らしい反応をする五和に

「なんなら五和着てみるか？」

「えつ！？」

「衣装ならまだ余ってるからな…それに今は色々な所でイベントやつてるから人も少ないし」

「いいじゃないの！五和！…着せてもらえよ…！」

少し戸惑つてゐる五和に建富はヒソッと耳打ちをした。

「いいじゃないの五和！」

「でも…」

「これで上条が着替えた五和の隣に行けば、それはまるで結婚式な

のよ

建宮がそこまで言つと五和は顔を真つ赤にし

「も～やだ～建宮さんっ！～～～」

バチンッ！とすゞい音を立てて建宮を殴り飛ばした。何人かの天草式は教皇代理～！～と駆けよつているが殴つた五和は無視して何時だか見た腰をクネクネとさせている。

「神裂、お前はいいのか？」

「いっ、いえ～私は別に…」

急に話を振られ動搖する神裂であつたが、そんな神裂に先ほど殴り飛ばされた建宮が急に立ち上ると

「大丈夫です！女教皇！～あなたのウエディングドレス『墮天使エロメイド』はちゃんと！」にあります～～～！」

どこから出したのか分からぬが、かつて当麻にドギッイ印象を与えたトンでも衣装を持つて神裂に近づいてきた。

「余計な事をオオオ～～～！」

~~~~~

「おお～なんか盛り上がってるな～！」

そう言つて慌ただしい教室に入ってきたのは不良っぽいイメージを

『『える浜面とジャージに身を包む滝壺であった。』』

「よお浜面、滝壺」

「なんか随分と個性丸出しな喫茶店だな」

教室に大勢いるウエディングドレスの少女達を見ながら正直な感想を述べてみると

「どうだ滝壺着てみるか？」

「いーの？」

興味ありげに見ていた滝壺に当麻が尋ねると滝壺はつりゅうと笑みをもらし聞き返してきた。

「ねつ別にいいが、ビーチならそのまま結婚式挙げてやるよ

「なつ！？何言つてんだ！？」

~~~~~

顔を真っ赤にする浜面をしばらくの間からかっていると女子生徒に従つてついて行つた滝壺が白いウエディングドレスを着て戻ってきた。

「はまづら……似合つ？」

「おつーおつー。」

滝壺の質問に少し遅れて浜面が答えると

「よ～し、このまま結婚式でもやるか…」

「だからいいから…そのノリ…！」

先ほど当麻がふざけて言つたことだが、浜面もいい加減腹が立つて
きたのか

「そりが…そんなにやりたいならお前にもやつしもやつ事があるぞ」
「…なんだよ？」

「みんな～ん…今から当麻君に盛り上げてもうつ為に一曲歌つて
もらいましょう…」

「はあ…?」

お客様の数が減つてきたクラスでは暇なのか何だと面白がつて奥
の厨房から出てくる者達もいた。

「いやいや待て！無理だから…」

「では歌つてもういましょう…上条当麻君で、曲は『ゼロからの逆

襲』」

「…………なぜだ…歌える気がしてきた…」

浜面がどこからか持つてきた学園都市には珍しいカラオケセッテ（
カセットv e r）を持って当麻が歌いだそつとする

「パパアーン…！」

突然、当麻のちょうど前にあつたドアがガラガラッと勢いよく開け
られ、一人の少女が入ってきた。

「えつ？」

「パパ～！…私だよ！パパ～！…み！…な！…つ！…美しい夏で美夏！」

少女は当麻に近づくとその手を握りて上下に振り出した。

「いや…お前誰？」

「もう25年後から来たパパンの娘だよ…。」

当麻は暫く睡然として何も出来ないでいると、少女は辺りに目をやりクラスメイトや客が多いクラスの中で一人の少女を見ると

「あやー…ママン……せだー……ママンもピチピチじゅん…。」

そう言いながら客の中にいて、何事が起こりを見つめる御坂のもとに飛んでいき今度は御坂の手を握り出した。

「マジ…ママン！？」

「そう私はパパンとママンの子供だよ…。」

「そうだ…！」

少女は何かを思い出したかのように御坂の手を放し再び当麻の手を握つて、当麻を無理やりそ外へと連れ出して行つた。

「未来が大変なの…！…パパンの力を貸して…！」

「いや！…だから何が！？」

「こうしてゐる間にも奴らが私を追つて來てるの…！」

「ねえ…！…君聞いてる…？」

周りにいたみんなも最初は茫然と立ち尽くしていたが、出でいく当麻達に少し遅れてそれについて行つた。そして、学校に校庭に出る

物体を見て、と学校の校庭に突如現れた黒く巨大な空に浮かぶ船の様な形をした

「なあ…美夏…何アレ?」

「あれはネオローマ正教だよ……パン……」

本当に何がなんだか分からぬが、この様な事態になると大抵面倒な事になる事を当麻は悟つてゐたので深くため息をついてゐると、何故だか知らないが顔を赤くした御坂が当麻の隣に立つた。

「ウホンッ！ しつ仕方ないわね！ いくらあんたとの子供とは言え、私の子には変わりないんだから！」

「ねらう！」

「いやつ！ 知らねーよ！ お前の戦う理由なんて…！」

当麻がツツコンでいるとき度はその隣に天草式（武装済み）が立ち並んだ。

「よく分かりませんが…戦うしかないみたいですね…」

「いや！納得すんな！！なんでもやる気満々マンー？」

当麻のツツコミも無視し皆はウオオオ！と雄叫びをあげ謎の飛行物体へと走つて行つた。

「あ～もう一なんでみんな戦う気になつてんの！？もう一不幸だア
アアア！-----！」

俺達の戦いは終わらない！！

『愛読ありがとうございます！』

楽しい『学園祭』と『俺達の戦いはこれからだーー』（後書き）

終わりましたが、なんだかな～

やつぱり、書きたいことが他にもあると中々集中できません。
とりあえずジャンプの打ち切りっぽく終わらせてみました。

まあとりあえず、御愛読ありがとうございました！！

マルコの次回作に御期待下さい！！！

なんだか前の話を最終回にしてはよかったです。

そんなこんなで終わりましたがまた近いうちに新しいのを出します。

それは長いです。

てゆーか、ちょっとした小話をひたすらやつてこくせんなん感じです。

ではまた今度。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5977n/>

とある未来の分岐点？

2010年10月12日10時14分発行